

(1) 教育実習から学んだこと 〈6〉

3.11 の被災下における教育実習 (高校 英語)

文学部 4年 Y.M

◇被災地福島での実習

私は9月15日から10月7日までの3週間、母校である福島県立A高等学校において教育実習を行った。3月11日に発生した東日本大震災の影響で、福島県は地震や津波によって甚大な被害を受けただけでなく、それに付随する東京電力の原子力発電所事故の影響で、7ヶ月以上経過した現在でも苦しい生活が続いている。その状況は決して他人事ではなく、実際に実習を行わせていただいた私の母校も校舎が半壊してしまい、現在生徒たちは校庭に応急に建設したプレハブ校舎にて勉学に励んでいるのだ。このような特別な状況下において実習が行えるのか、きちんとした環境の整った別の学校で実習を行うべきなのではないかと悩んだ時期もあったが、大学の手厚いバックアップと母校のご配慮のおかげで、無事に実習を行うことができた次第である。法政大学付属校での実習を大学教職担当から提案していただいていたものの、私はあえてこの状況下だからこそ福島県の母校で実習を行うことを希望した。このような非常事態だからこそ、何か感じ取ることが絶対にあると感じていたし、何より大好きな地元の様子を自分の目で確かめたいと考えたからである。非常に混乱を極めている最中にもかかわらず、快く受け入れてくださった母校には大変感謝している。

このような状況下で始まった私の教育実習であるが、1週目に更なる自然災害に見舞われる。日本列島に台風が接近し、福島県を直撃したのだ。電車通勤していた私自身、交通

機関の乱れによりやむを得ず遅刻したり、台風による大雨であらゆる川が決壊し、自宅が床上、床下浸水して欠席する生徒も目立った。そんなある日、昼休みに緊急の職員会議が設けられた。そこでは、更なる天候悪化を見越して午後から学校を臨時休校にするかが全教員の多数決によって決定された。私は教育実習に来るまで、このような学校全体の意思決定は校長や教頭など上層部の教員によって独断的に決められるもので、一般の教員たちはそれに従うのみであると考えていたため、大変意外な心地がした。この職員会議において、様々な教師によって活発な意見交換がなされ、その結果として学校の意思が決定されていく様子を目の当たりにし、学校経営の風通しの良さを感じることができた。

◇不安と災害への対処のなかで進められる学校行事

実習2週目には、体育祭や合唱コンクール、文化祭があり、教師でも生徒でもない特殊な立場から、高校生活の一大イベントを一気に体験することができた。しかし、ここにも原子力発電所事故の影響が顕著に表れており、私の心は憂うつになった。例えば、母校の体育祭では、例年屋外グラウンドを使って男女混合リレー、男子サッカー、女子ドッジボールが行われるのが恒例であったが、高い放射線量を懸念して、本年度はできるだけ短い時間に短縮してリレーを行うにとどまり、男子サッカーは室内フットサルへ、ドッジボールも屋内競技へと変更になっていた。体育祭だ

けに限らず、現在母校には様々な原子力発電所事故の悪影響が及んでいる。毎朝、屋外及び室内の放射線量を測定することは震災発生以後、当たり前前の習慣となっているし、いまだに大きな地震が頻繁に発生するため、その度に急造のプレハブ校舎が無事であるかを心配する。この点について、私が大変驚いたのが、プレハブ校舎の心配をすることはあっても、震度4程度の揺れでは誰も驚く人がいないことである。先の大震災以後、福島では今でも大きな地震が多いため慣れてしまったのであろう。更に、校長先生に伺った話のなかで、転校していく生徒の数が非常に多いということも知った。放射能の影響を懸念して、北海道や東京など県外の学校に転校するのだ。実際に私が実習している間にも、私のクラスの生徒2名が転校していった。このような悲しい現実のなかでも、文化祭や合唱コンクール、体育祭などに一生懸命、楽しそうに取り組む生徒たちの様子を見て安心したのと同時に、私自身大変勇気づけられた。

最終週である3週目に入り、ついに授業観察や教壇実習に本格的に取り組み始めた。授業観察では受け持ちの1学年だけではなく、全学年の授業を見学させていただいたのだが、学年ごとに全く違った授業展開がなされており、大変興味深かった。例えば、同じ受験を見据えるにしても、1年生は基礎をしっかりと固める時期であるのでいちいち細かく意味をとったり、しつこいくらいに文法事項の確認をしていたのに対し、3年生は目前に迫った大学受験を意識して、ひたすら文法問題演習をしたり、様々な大学入試の過去問を利用して長文読解の訓練をしていた。

◇教壇実習に取り組んで

教壇実習では1学年の5クラスを受け持ち、科目は英語Iとオーラルコミュニケーションを担当させていただいた。実際に自分で授業を行ってみて、指導教官に指摘され痛感した

ことは、文脈にした和訳よりもできるだけ文法に忠実な和訳が求められるということである。私が普段大学で学んでいる訳し方に慣れてしまっていて、いかに文法に則して訳せるかということよりも、いかに文脈に自然な形で訳せるかということに無意識に重きを置いてしまっていたのである。1年次はあくまでも絶対的な基礎を固める時期であるから、上手く訳せるかというよりも文法事項を理解できていることの方が優先されるべきことなのだ。また、生徒の間違いに対するフォローも大変難しかった。学習指導案を作成していく段階で、ある程度生徒の間違えそうな箇所を予想してはいたものの、実際に授業を行ってみると想定外の箇所で生徒が間違えたりする。その時に、あっさりはこちら側から正しい答えを提示するのではなく、助け舟を出して誤った答えから正しい答えへと導くのが難しかった。

このように私の体験した教育実習は、3週間という短い期間であったものの大変中身の濃いものであった。また、未曾有の大災害の影響で、普通の教育実習生が過ごすものよりも貴重な体験をすることが出来たと思う。このような多忙な時期にも関わらず快く受け入れてくださった校長先生、熱心に指導してくださった指導教官、私の拙い授業を一生懸命聞いてくれた全ての生徒たちに感謝している。私は、これから教員とは違う道を歩むわけにはあるが、この貴重な教育実習で得たものを忘れずに全てのことに一生懸命取り組んでいきたいと思っている。